【全体研究】

「書く力」を高めるための言語活動の充実を目指した学習指導の在り方
～書き方のモデルと相互評価の工夫を通して～

目　　次

Ⅰ　研究の概要

1　研究主題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

2　主題設定の理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

3　研究の目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

4　研究の仮説　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

5　研究の全体構想　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

6　研究経過　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

Ⅱ　研究の実際

1　研究の基本的な考え方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

(1)　言語活動と「書く力」について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

(2)　研究主題について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

2　「全国学力・学習状況調査」及び「みやざき小中学校学力・意識調査」
で問われている書くことに関する力　・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

3　目的に応じた書き方のモデルの作成と活用　・・・・・・・・・・・・・　9

4　視点に沿った相互評価の工夫　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１０

5　書き方のモデルと相互評価を活用した書く活動の流れ　・・・・・・・　１１

6　授業の実際

(1)　授業実践例①（中学校第２学年　理科）　・・・・・・・・・・・・・　１２

(2)　授業実践例②（小学校第６学年　体育科）　・・・・・・・・・・・・・　２１

Ⅲ　研究の成果と今後の課題

1　研究の成果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３０

2　今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３０

《参考文献》　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３０

Ⅰ　研究の概要

１　研究主題

「書く力」を高めるための言語活動の充実を目指した学習指導の在り方
～書き方のモデルと相互評価の工夫を通して～

２　主題設定の理由

現代社会は、情報化、価値観の多様化等が進み、日々めまぐるしく変化している。中央教育審議会答申では、これからの社会は、新しい知識・情報・技術が社会生活の基盤として重要性を増す「知識基盤社会」であり、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいた判断が一層重要となることが述べられている。このような社会をたくましく生き抜いていくためには、あふれる情報の中から自分にとって有用なものを取捨選択し、その中から得られる知識を自分のものとし、これらを活用していく力が必要となってくる。平成１８年実施の経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）による学習到達度調査（ＰＩＳＡ）では、日本の児童生徒について、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や知識・技能を活用する能力等に課題があることが明らかになった。

このような中、新学習指導要領総則では、思考力・判断力・表現力を育成する観点から、各教科等における言語活動を充実することが示された。そこでは、言語がすべての学習の基盤であり、国語科における言語に関する能力の育成だけでなく、新しい概念を獲得し体系化していくことや、対話によって思考を深めていくことなど、すべての学習のプロセスは言語によって大きく支えられていることが述べられており、各教科等の学習における言語力育成を意識した活動が重要とされている。また、平成２０年の中央教育審議会答申によると、「幼児期から小・中・高等学校へと発達の段階が上がるにつれて、具体と抽象、感覚と論理、事実と意見、基礎と応用、習得と活用と探求など、認識や実践ができるものが変化してくる」とあり、発達の段階に応じた言語活動を充実させていくことが大切であると言える。

平成１９年度から平成２１年度までの全国学力・学習状況調査の結果では、全国平均と本県の平均を比較すると、小・中学生ともに、国語と算数・数学の基礎・基本は概ね定着しているものの、小学生の算数の活用力については、まだ伸びる余地があるととらえることができる。このことについては、「のびよ！宮崎の子どもたち　第２期　明日の宮崎を担う子どもたちを育む戦略プロジェクト」の１年次の成果にも挙げられている。この結果を問題形式別で見てみると、記述式がやや苦手であり、特に、自分の思いや考えを目的に応じて書くことができていないことが明らかになった。また、みやざき小中学校学力・意識調査においても、資料の情報を基に、条件にしたがって相手に分かりやすく伝えるために文章を書いたり、的確に読み取って説明するための文章を書いたりなど、「書く力」が小・中学校とも十分には身に付いていないことが分かった。

研究員の所属する学校の教師を対象に行ったアンケート調査によると、新学習指導要領に示されている「各教科等における言語活動の充実を図ること」については、約６４％の教師が理解していると答えている。そのうち、普段の授業において、約半数の教師が言語活動の充実を図る指導に取り組んでいると答えている。言語活動の充実を図る指導としての取組については、話合いやスピーチ、音読、発表、説明等の話すことを中心とした言語活動は多く取り入れられているが、レポートや感想、説明の原稿等、書くことを中心とした言語活動はあまり取り入れ

られていないことが分かった。発表や話合いにおいて、書いてから話す言語活動も考えられるが、全体的にそのような例は少ない傾向にある。このような現状から、言語活動を充実させるための手立ての１つとして、学習活動の中に意図的・計画的に書く活動を取り入れた研究を進めていく必要があると考えた。

以上のことを踏まえ、研究員研修の全体研究として、「言語活動の充実を目指した学習指導の在り方」について、特に「書く力を高める」ことに焦点を当てて研究を進めていくことにした。本研究では、「書く力」を、表やグラフ、観察・実験、体験活動、身体表現等の「情報」を取捨選択し、記録、要約、説明、論述等の「目的」に応じて自分の思いや考えを文章で書く力ととらえた。また、書き方のモデルを作成して授業で活用することや、評価の視点に沿った相互評価を授業に取り入れることが有効ではないかと考えた。

このように、実践的な研究を進めていき、県内の先生方に広めていくことにより、本県の教育的課題の解決に寄与できると考え、本主題を設定した。

３　研究の目的

本県の教育的課題を把握した上で、「書く力」を高める言語活動の充実を目指した学習指導の在り方についての理論を構築し、授業検証を通して、書き方のモデルと相互評価の言語活動の充実を図る有効な在り方を究明する。

４　研究の仮説

児童生徒の意識や実態に合った書き方のモデルを作成して授業で活用したり、評価の視点に沿った相互評価を授業に取り入れたりして言語活動の充実を図れば、児童生徒は、情報を基に目的に応じて自分の思いや考えを書くことができ、そのことによって「書く力」を高めることができるであろう。

5　研究の全体構想

『生きる力』の育成

社会の情勢
時代の要請
学習指導要領
本県の教育的課題

研究主題（ 副題 ）

「書く力」を高めるための
言語活動の充実を目指した学習指導の在り方
～書き方のモデルと相互評価の工夫を通して～

教育基本法
学校教育法
その他の関係法規
各種の答申

研究の目的

本県の教育的課題を把握した上で、「書く力」を高める言語活動の充実を目指した学習指導の在り方についての理論を構築し、授業検証を通して、書き方のモデルと相互評価の言語活動の充実を図る有効な在り方を究明する。

目指す児童生徒像

○　情報を基に、目的に応じて、思いや考えを書くことができる子ども
○　友だちが書いた文を、目的に応じた評価の視点に沿って評価できる子ども

研究仮説

児童生徒の意識や実態に合った書き方のモデルを作成して授業で活用したり、評価の視点に沿った相互評価を授業に取り入れたりして言語活動の充実を図れば、児童生徒は、情報を基に自分の思いや考えを書くことができ、そのことによって「書く力」を高めることができるであろう。

研究内容

実践研究

書く力を高める指導
書き方のモデル作成と授業での活用

書く力を高める評価
相互評価の在り方

理論研究

書く力を高めるための理論構築
言語活動と「書く力」について
「書く力」を高める授業の在り方について

調査研究

書く力を高めるための調査・分析
「全国学力・学習状況調査」及び「みやざき小中学校学力・意識調査」の分析
教職員の意識・実態調査と調査結果についての分析と考察

6　研究経過

月	研究内容	研究方法	備　考
4	学習指導要領等の分析 宮崎県の課題の分析 研究員所属校の現状の分析	文献研究	
	研究主題・副題の設定 研究仮説の設定 研究内容の検討 研究計画の立案 研究の全体構想の検討	理論研究	
5	調査方法・項目の検討	調査研究	
	研究実践校の実態把握	アンケート等の実施と分析	高岡小学校 青島中学校 大塚中学校 妻中学校 志和池小学校
	言語活動についての研究 書き方のモデルについての研究 相互評価についての研究	文献研究	
6	指導や評価の在り方の検討 検証授業Ⅰの構想	文献研究	
	事前準備 研究実践校との打合せ	検証授業の打合せ	青島中学校
	検証授業Ⅰの指導案の検討、提示資料等の作成	理論研究	
7	検証授業Ⅰの指導案の検討、提示資料等の作成	理論研究	青島中学校
	検証授業Ⅰの実施 事後研究による授業分析	実践研究	
	研究内容の修正 中間発表資料の作成	文献研究	
8	研究内容の修正 中間発表資料の作成	文献研究	
	指導や評価の在り方の検討 検証授業Ⅱの構想と指導案の検討	文献研究	
	事前準備、研究実践校との打合せ	検証授業の打合せ	高岡小学校
9	検証授業Ⅱの指導案の検討、提示資料等の作成	実践研究	
	検証授業Ⅱの実施 事後研究による授業分析	理論研究	高岡小学校
１０	成果と課題の整理 研究報告書の作成	理論研究	
１１	研究報告書の作成	理論研究	
１２	研究報告書の作成 プレゼンの作成	理論研究	
1	プレゼンの作成 発表原稿の作成	理論研究	
2	プレゼンの修正 発表原稿の修正	理論研究	
3	研究発表 研究のまとめと反省	理論研究	

Ⅱ　研究の実際

1　研究の基本的な考え方

(1)　言語活動と「書く力」について

各教科等における言語活動は、教科のねらいを効果的に達成する手段であるとともに、そのことが思考力・判断力・表現力等の育成につながるものである。

言語活動は、話すことや聞くこと、書くこと、読むこと等の活動が相互に関連して展開される。本研究では、この中でも、中心的な役割を果たす「書くことの言語活動」に焦点を当て、「書く力」を高めていく。

本研究では、「書く力」を次のようにとらえた。

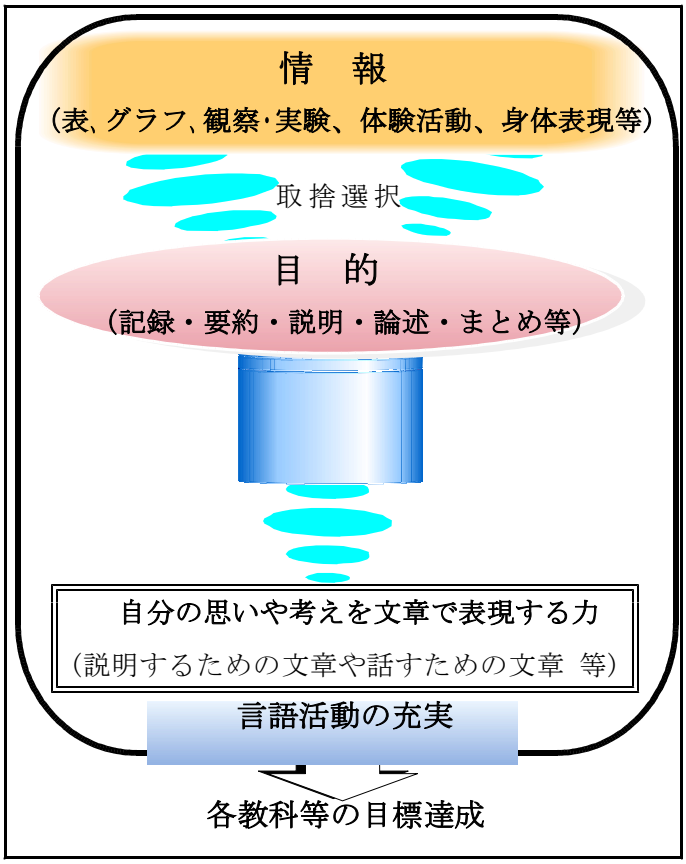
表やグラフ、観察・実験、体験活動、身体表現等の「情報」を取捨選択し、記録、要約、説明、論述等の「目的」に応じて自分の思いや考えを文章で表現する力

ここでいう「目的」とは、書くことの目的となる言語活動例のことである。

また、「書く力」を、過去３年間にわたる「全国学力・学習状況調査」及び「みやざき小中学校学力・意識調査」で問われている書くことに関する力として整理した。（詳細は、後述の資料３「全国学力・学習状況調査」及び「みやざき小中学校学力・意識調査」で問われている書くことに関する力　７～８頁参照）

本研究で考える言語活動の充実は、右の資料１のように考えた。

表、グラフ、観察・実験、体験活動、身体表現等の様々な情報の中から必要な情報を取捨選択し、何のために書くのかという目的に応じて自分の思いや考えを文章に書くことにより、言語活動を充実させていく。この「書く力」を高めることを通して、各教科等の目標の達成につなげていく。



【資料１　言語活動のイメージ図】

(2)　研究主題について

中央教育審議会答申では、「各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である」と述べられ、各教科等の具体的な取組についても示されている。また、知的活動（論理や思考）の基盤だけではなく、コミュニ

ケーションや感性・情緒の基盤という役割をもっていることも示されている。

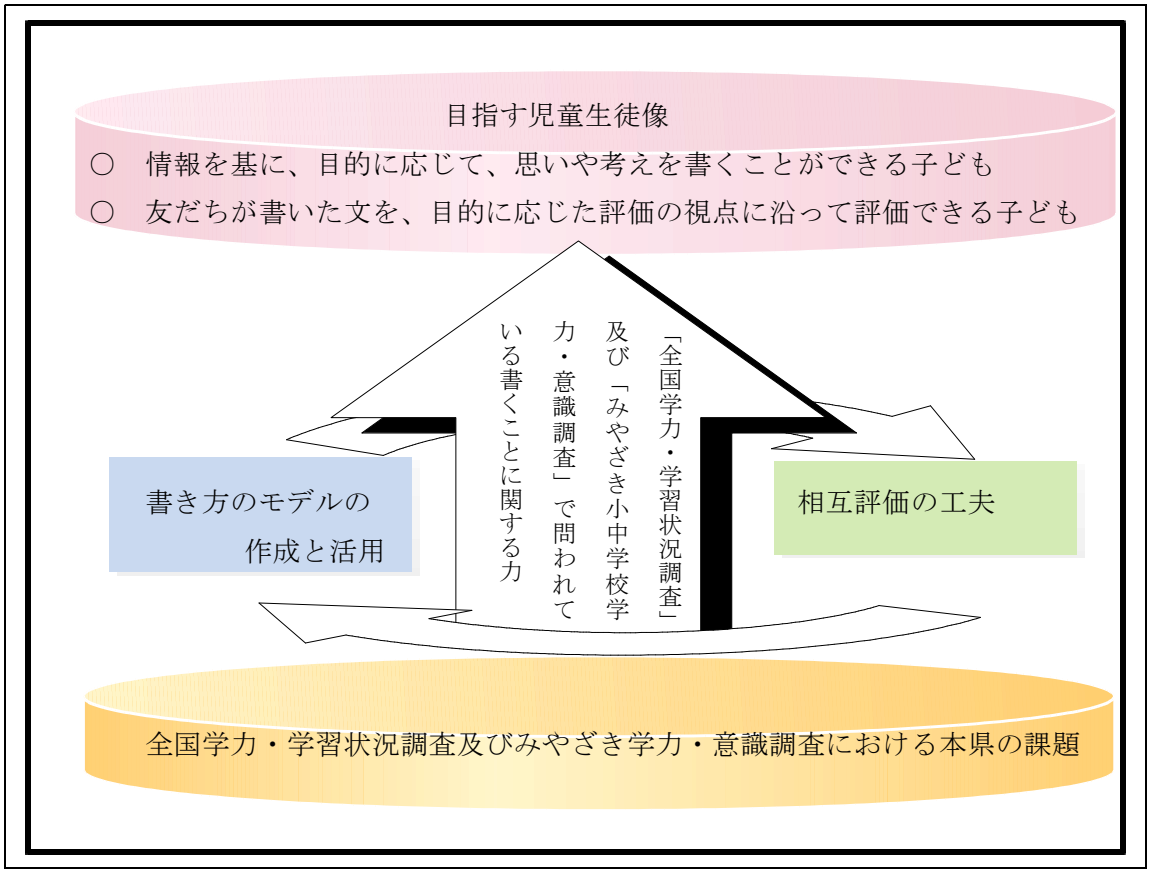
本研究における「書く力」は前述の通りであり、授業において、書くことの言語活動を充実させながら高めていく。

これらのことから、本研究では、「『書く力』を高めるための言語活動の充実をめざした学習指導」を次のように考えた。

> 当該教科等の目標を実現するために、「全国学力・学習状況調査」及び「みやざき小中学校学力・意識調査」で問われている書くことに関する力を高めるための活動を意図的、計画的に授業の中に設定する学習指導

本研究では、授業において、書き方のモデルを作成して授業で活用したり、評価の視点に沿った相互評価を授業に取り入れたりした。それにより、目的に応じて、自分の言葉で的確に記述できるようになり、書く力を高めていくことができるのではないかと考える。このことが、各教科等の目標を達成することにつながるとともに、思考力・判断力・表現力等の育成に資することにもつながる。

授業における「書く力」を高める言語活動の充実を目指した学習指導のイメージを資料２に示した。



【資料２　授業における「書く力」を高める言語活動の充実を目指した学習指導】

２　「全国学力･学習状況調査」及び「みやざき小中学校学力･意識調査」で問われている書くことに関する力

本研究において高めていく「書く力」を具体化するために、「全国学力・学習状況調査（平成１９、２１、２２年度)」と「みやざき小中学校学力・意識調査（平成１９、２０、２１年度)」の書くことに関する出題の趣旨や指導改善のポイント等から問われている力を洗い出し、教科別、学校種別に、以下の資料３に整理した。（以下、「問われている力」という。）

【国語】

	問　わ　れ　て　い　る　力
小学校	○　文の論理を考え、構成を整えて書く力 ○　指示された字数や文の数、文末表現などの条件に基づいて、必要のある事柄を取捨選択して適切に書く力 ○　自分の考えが明確になるように文章全体の構成を工夫する力 ○　問題となる事実や意見根拠、結論などの書く事柄を文章の構成や記述に役立つように収集し整理する力 ○　自分の思いや考えが効果的に表現されているかどうかを読み手の立場に立って自己評価する力 ○　書いたものを読み合い、感想や意見を述べたり、表現の仕方に着目して助言し合ったりする力 ○　書く文章の種類や特徴を踏まえて推敲・評価する力 ○　事実と感想・意見、理由と根拠等を区別して分類したり構造的にまとめたりする力 ○　様々な様式や形式、書式に即して書く力 ○　相手や目的を意識し、自分の考えが伝わるように分かりやすく書く力 ○　目的や意図に応じて、事実を客観的に記述する力 ○　全体を見通して書く事柄を整理する力 ○　文章と資料とを関係付けて書く力 ○　資料にある読み取った情報を基に、気付いたことや考えたことを簡潔にまとめて書く力 ○　文章を要約したり要旨をまとめたりする力 ○　目的や意図に応じて、事実を客観的に記述する力
中学校	○　相手意識や目的意識を明確にして書く力 ○　統計資料などのデータを読み取り、それを根拠として引用しながら、自分の考えを書く力 ○　説得力をもたせるために、本文を引用するなどして、理由や根拠を客観的に述べる力 ○　主語（主部）に対応させて述語（述部）を適切に書く力 ○　書いた文章をペアやグループで読み合い、学び合い、相互に評価し合うことによって推敲し、自分の表現に役立てる力 ○　異なる立場の意見やその根拠にも十分配慮して、意見を構築させ、説得力のある文章を書く力 ○　比較したり、関連付けたり、第三者に伝わるように根拠を挙げたりして書く力 ○　選材や構成の段階で目的や相手について意識させたり、記述の段階で表現しようとする内容に最もふさわしい語句を選んだりする力 ○　文章を伝えたい内容に応じて必要な事柄を過不足なく取り上げて書く力 ○　文字数を制限して、伝えたい内容を意味を変えずに短く書き直したり、同じ内容を違った表現で言い換えたりする力 ○　文章や資料から読み取ったことを自分の学習や生活に生かす力

【社会】

	問　わ　れ　て　い　る　力
小学校	○　資料に述べられている文字情報を、箇条書きにしたり構造図にしたりして文章に書く力 ○　資料から自分の考えをもち、その考えに適した資料を選択し、根拠に基づいて自分の意見をまとめる力 ○　自分の考えや立場を、根拠となる事実を明確にしてまとめ、説明する力
中学校	○　複数の資料を関連付けて共通内容を読み取り、それをもとに考察し、記述する力 ○　多面的・多角的な見方・考え方を身に付け、事象が起こった理由を、様々な条件から考察し、それを説明する力

【算数・数学】

	問　わ　れ　て　い　る　力
小学校	○　説明する対象を明らかにして、条件を基に、計算の性質，図形の性質や定義，数量の関係を言葉や式を使って説明する力 ○　説明する対象を明らかにして、表やグラフなどから見いだせる傾向や特徴を言葉で説明する力 ○　問題を解決するための自分の考え方や解決方法を言葉や式等を使って説明する力 ○　他者の考え方や解決方法を理解して、それを自分なりに言葉や式を使って説明する力 ○　ある場面の解決方法を基に別の場面の解決方法を考え、言葉や式を使って説明する力 ○　問題を解決するための自分の考え方や解決方法を言葉や式等を使って説明する力 ○　他者の考え方や解決方法を理解して、それを自分なりに言葉や式を使って説明する力 ○　ある場面の解決方法を基に別の場面の解決方法を考え、言葉や式を使って説明する力 ○　ある事柄が成り立つことの理由や判断の理由を、「ＡだからＢとなる」のように、Ａという理由及びＢという結論を明確にして言葉や式を使って説明する力 ○　理由として取り上げるべき事柄が複数ある場合には，それらをすべて取り上げる力
中学校	○　日常的な事象を観察し，成り立つ数学的な事柄を指摘し，それを数学的な表現を用いて説明する力 ○　文字式などを活用して事柄が成り立つ理由を説明する力 ○　表やグラフから情報を適切に選択したり数学的に説明したりする力 ○　与えられた情報を分類整理し、必要な情報を選択して判断したり、情報に基づいて理由を説明したりする力 ○　不確定な事象をとらえるために，多数回試行することによってその特徴を的確に把握したり，その事象についての予想を確かめたりする力 ○　事柄が成り立つ理由を数学的な表現を用いて説明する力 ○　方針を立て、それにもとづいて証明を書く力 ○　説明を読み、その結果を振り返り、発展的に考えて説明する力 ○　いろいろな条件を整理して、解決への見通しをもち、ことがらが成り立つ理由を、数学的な表現を用いて説明する力 ○　自分や他者が行った証明や説明を評価し、その評価に基づいて改善しようとする力 ○　事象を理想化したり単純化したりして、問題解決の方法を数学的に説明する力 ○　問題解決に向けて、考えを比較・分析し、それを説明する力

【理科】

	問　わ　れ　て　い　る　力
小学校	○　複数の現象を比較させ、その違いを説明する力 ○　これまでの学習内容と新たに与えられた情報とを結び付けながら、比較させたり関連付けさせたりして解決させ、その過程を論理的に説明する力 ○　言葉の意味を整理して現象等を説明する力 ○　モデルや図を使ってまとめたり説明したりする力
中学校	○　多様な資料から情報を的確に読み取り、比較しながら説明する力 ○　結果と理由を結びつけて説明する力 ○　与えられた情報を項目ごとに整理し、読み取ったことと知識を結びつけて解決につながる答えを書く力 ○　与えられた情報を正確に読み取り、課題の解決に向けて論理的な説明や表現をする力 ○　身近な現象を取り上げ、具体的に説明する力

【外国語（英語）】

	問　わ　れ　て　い　る　力
中学校	○　関連付けられたキーワードとなる語彙を手がかりに、自分の思いや考えを書く力 ○　与えられた資料が分かりやすく伝わるように書く力

【資料３　「全国学力・学習状況調査」及び「みやざき小中学校学力・意識調査」で問われている書くことに関する力】

３　目的に応じた書き方のモデルの作成と活用

「全国学力・学習状況調査」や「みやざき小中学校学力・意識調査」に見る研究員所属校の児童生徒の実態から、書くことが苦手な理由として、次のようなことが分かった。

○　自分の考えを話すことはできるが、それを文章にすることに抵抗があり、書こうとする意欲が低下してしまう。
○　事実と意見・感想を区別できていない。
○　「できた」という実感や達成感を得ていない。
○　どのような情報をどのように文章に書き表したらよいか、書き方が分からない。

このような実態を受け、本研究では、児童生徒の実態に即して書き方のモデルを作成し、授業で活用することで、国語科だけでなく、各教科等において「書く力」を高めていくことを目指した。書き方のモデルとは、「目的に応じて文章を書くために、どのような情報を取捨選択し、どのように書いたらよいかを示す書き方の例」ととらえた。

書き方のモデルを作成する際には、生徒が自分の思いや考えを整理してまとめて書くことができるように、次の２つを吟味して作成した。

①　「情報」をどのように取捨選択するか。
②　「目的」に応じた書き方とはどんなものか。

「情報（目的に応じて書くための情報）」と「目的（書くことの目的となる言語活動例）」については、次のようなものが考えられる。

情　　報	目　　的
○　図表や絵、グラフ、写真等から読み取ったこと	○　記録
○　身近なことや想像したこと	○　要約
○　観察・調査・見学したこと	○　説明
○　観察・実験の結果	○　論述
○　楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったこと	○　討議や討論
○　作品を鑑賞して感じ取ったこと	○　批評し合う活動
○　体験活動	○　伝え合う活動
○　身体表現　等	○　交流する活動　等

まずは「全国学力・学習状況調査」及び「みやざき小中学校学力・意識調査」で問われている書くことに関する力から、児童生徒の実態や各教科等の指導内容に合わせて、書き方のポイントを考えた。それらをもとに、書き方のモデルを作成する。具体的な書き方を示すことにより、書く力を高めることができると考える。

４　視点に沿った相互評価の工夫

本研究では、児童生徒の書く力を高めるために、目的に応じた書き方のモデルを授業で活用していくが、その際、児童生徒自身が、自分の書いたものを自己評価することにより、自分の思いや考えをよりよいものに推敲することができると考えた。また自己評価を生かしつつ、さらに自分の思いや考えを広げたり、目的に合った表現をしたりするために、より客観性のある相互評価も授業に取り入れた。

相互評価とは、「自分が書いた文章をさらにより目的に応じた文章にするために、評価の視点に沿って評価し合い、互いのよさや改善点を伝え合う活動」ととらえた。

相互評価は、書き方のモデル作成に当たって考えた「書き方のポイント」を視点とし、それに沿った相互評価をした。視点に沿って評価をすることは、他者の評価をするだけでなく自分自身の記述を振り返ることにつながる。このことは、自分の書いた文章のよさや改善点に気付くことになり、ひいては書く力を高めていくことにつながると考えた。

児童生徒間でコミュニケーションを通して相互評価をさせることは、書き方の理解を深めることにもなると考えた。さらに、このことは、書こうとする意欲を高めたり、「できた」という達成感を味わわせたりすることにもつながると考えた。

資料４に、検証授業で使用した相互評価シートを例として示した。

相互評価に書かれた友だちの記述を基に自分の文章をよりよいものに修正したり、友だちへのアドバイスを書きながら、自分の記述の良さや修正すべき点に気付いて修正したりすることができるようになれば、書く力が高まったとみることができると考える。

第２学年理科相互評価シート

（　　）組（　　）番　氏名（　　）

評価のポイント
①自分の考えた結論がはっきり分かるように書いているか。
②なぜその結論になったのか、理由を呼吸の仕方・ふえ方など、これまでに学習した動物の特徴をもとに書いているか。
③読んで分かりやすい文章になるように書いているか。

①～③について、下の基準で評価してください。また、気付いたことについては、良い点や改善するともっと良くなる点について書いてください。

４：よい　３：だいたいよい　２：あまりよくない　１：よくない

評価者氏名	評価	気付いたこと
	①（４　３　２　１） ②（４　３　２　１） ③（４　３　２　１）	
	①（４　３　２　１） ②（４　３　２　１） ③（４　３　２　１）	
	①（４　３　２　１） ②（４　３　２　１） ③（４　３　２　１）	
	①（４　３　２　１） ②（４　３　２　１） ③（４　３　２　１）	

評価のポイントを示す。これは、書き方のポイントと同じである。

この欄に、まず自己評価をさせる。

ここは相互評価で、友だちに書いてもらう。

より多様で客観性のある評価をさせるために一人一人に、短冊状のものを配付し、のりづけするなどの支援が考えられる。

【資料４　相互評価シート例（中学校理科）】

５　書き方のモデルと相互評価を活用した書く活動の流れ

書き方のモデルと相互評価を活用する場面は、各教科等の目標の実現につながるように、学習指導過程の中に意図的、計画的に設定した。設定の仕方については、資料５のような３つのパターンが考えられる。それぞれのパターンにおいて、各教科等の目標や学習指導過程の流れによっては、「文章を書く」ことを、授業の事前の活動として扱うこともある。

Ａ	Ｂ	Ｃ
書き方のモデルを通してポイントを確認し、自分の書いた文章を評価して次へ生かす。	書き方のポイントを見て文章を書き、評価し合った上で、書き方のモデルを見て確認する。	書き方のモデルからポイントを確認し、自分の考えを文章に表し、評価し合って練り上げる。
文章を書く。 ↓ 書き方のモデルを提示する。 ↓ 書き方のポイントを確認する。 ↓ 相互評価を行う。 ↓ 書き方のモデルや相互評価をもとに文章を書く。	書き方のポイントを確認する。 ↓ 文章を書く。 ↓ 相互評価を行う。 ↓ 書き方のモデルを提示する。 ↓ 書き方のモデルや相互評価をもとに文章を書く。	書き方のモデルを提示する。 ↓ 書き方のポイントを確認する ↓ 文章を書く。 ↓ 相互評価を行う。 ↓ 書き方のモデルや相互評価をもとに文章を書く。

【資料５　書き方のモデルや相互評価を活用した書く活動の流れ】

６　授業の実際

（１）授業実践例①（中学校第２学年　理科）

ア　検証授業の考え方

単元名	いろいろな動物
単元の目標	○　いろいろな動物に関する興味・関心を高め、その生活の仕方や特徴を積極的に調べるとともに、身近な動物を大切にしようとする態度を育てる。 （自然事象への関心・意欲・態度） ○　動物の体のつくりや子の生まれ方などの特徴を動物の生活と関連してとらえ、共通点や相違点を根拠にして判断し、論理的な文章で表現できる力を育てる。 （科学的な思考・表現） ○　安全面に留意して無せきつい動物の体のつくりと特徴を観察できるようにする。 （観察・実験の技能） ○　いろいろな動物について、体のつくりや子の生まれ方などの特徴を理解し、これを基に動物の分類ができるようにする。（自然事象についての知識・理解）
本時の目　標	せきつい動物の特徴に関する情報から、必要な情報を用いて、同じなかまか違うなかまかを判断し、分かりやすく説明することができる。
問われている力	○　比較したり、関連付けたり、第三者に伝わるように根拠を挙げたりして書く力 ○　与えられた情報を項目ごとに整理し、読み取ったことと知識とを結び付けて、解決につながる答えを書く力 ○　与えられた情報を正確に読み取り、課題の解決に向けて論理的な説明や表現をする力
書き方のモデルの作成と活用	本時で高めたい書く力（求められている書く力）は上記のとおりである。生徒の実態を踏まえ、指導内容に照らして、次の３つが「書き方のポイント」となると考えた。 《書き方のポイント》 ①　結論がはっきりと書いてあるか。 ②　必要な特徴（呼吸、ふえ方、体温、体表）がすべて書いてあるか。 ③　分かりやすい文章で書いてあるか。 このポイントを基に、教師の示す書き方のモデルを以下のように考えた。 どちらもさわると温かく、体表は毛でおおわれ、子を産み、肺で呼吸をしている。 このことから、どちらもほ乳類の特徴をもつので、イヌとネコは同じなかまと考えることができる。 作成したモデルの活用は、本時の目標を達成するために、パターンＡ（書き方のモデルを通してポイントを確認し、自分の書いた文章を評価して次へ生かす。）で行った。教師の提示した書き方のモデルから、書き方のポイントを確認し、前時までに学習したせきつい動物の特徴を使って文章に表すことができれば、生徒の書く力を高めることにつながると考えた。

相互評価の在り方	せきつい動物の特徴という「情報」を基に、論理的な説明をする「目的」に応じて、分類について文章を書くことを授業でねらった。そのために、イヌ・ネコのなかま分けについて文章で書かせた。それを「書き方のポイント」に沿って、まず自己評価させた。その上で、小グループによる相互評価を行い、「書き方のポイント」に沿って、よいところや改善すべきところを記述させた。友だちの記述と「書き方のポイント」を意識させ、スズメとコウモリの動物のなかま分けにおいて、文章で表現させれば、生徒の書く力を高めることにつながると考えた。

イ　学習指導過程

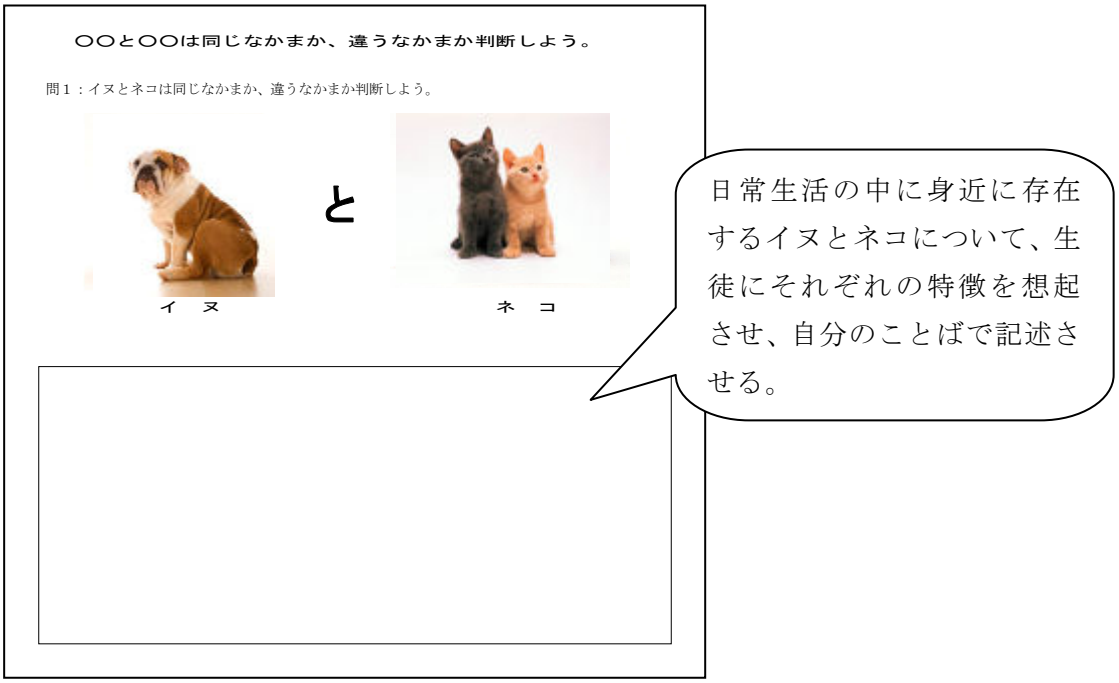
学習内容及び学習活動	パターンA
1　せきつい動物の５つのなかまの特徴について復習する。 2　本時の学習課題を確認する。 『同じなかまか、違うなかまかを判断しよう。』 3　イヌとネコについて、生活経験等を基に判断し、根拠を明らかにして結論を記述する。 ○　イヌとネコの特徴を、前時の学習と照らし合わせて考えるとどちらも同じなかまになりそう。 4　どのような判断をしたか発表して確かめる。 ○　自分の結論と同じだ。 ○　自分と同じ結論だけど、その理由が少し違う。 5　情報を基に分かりやすく書く方法について説明を聞く。 ①結論の明確化　②根拠の客観性　③読みやすい文章 6　グループで書き方について自己評価と相互評価を行う。 7　スズメとコウモリについて資料を基に比較し、判断したことを、根拠を基に記述する。 ○　姿は似ているが、特徴をみると違うなかまのようだ。 8　自分の記述したものを基にグループで意見交換を行う。 ○　自分の判断と同じだが表現の仕方に違いがある。 ○　自分の出した結論と違う。なぜだろう。 9　グループの意見をまとめ、全体発表を行う。 10　スズメとコウモリについて、５つのなかま分けの観点から説明を聞く。 11　クジラとコウモリについて考え、学習内容の定着を確認する。	情報を基に、目的に応じて**文章を書く。** ⇩ 目的に応じた**書き方のモデルを見る。** ⇩ モデルを基に**書き方のポイントを考え、確認**する。 ⇩ 書き方のポイントに沿って**自己評価→相互評価**をする。 ⇩ **書くポイントを意識して**別の情報を基に**文章を書く。**

ウ　授業の記録

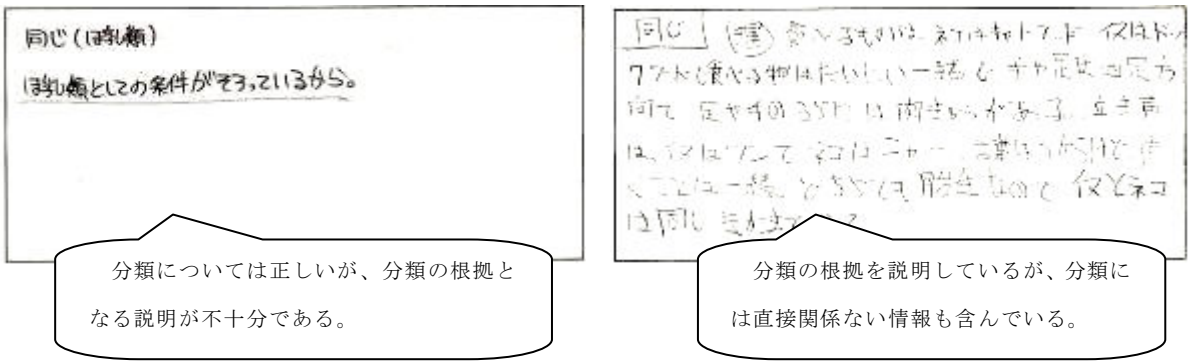
(7) 現段階で身に付いている「書く力」を用いて課題解決に当たる場面

生徒は、本時の学習までにせきつい動物の呼吸の仕方、なかまのふえ方などの特徴について学習してきた。また、これらの特徴によって動物のなかま分け（魚類・両生類・は虫類・鳥類・ほ乳類）ができることを学習してきた。

本時ではまず、資料６に示したワークシートを使い、イヌとネコが同じなかまになるのかあるいは違うなかまになるのかを判断して、その根拠を文章で表現する活動の場面を設定した。ここでは、前時までの学習をどの程度活用できるかを確認することを主なねらいとしながら、現段階で身に付けている表現力によって自分の考えをどのように「文章で表現する」ことができるかをみた。イヌとネコは生徒にとって身近な動物なので、同じなかま（ほ乳類）だという判断をすることができ、資料７に示したワークシートのように分類に関する特徴に触れながら分かりやすい表現をしている生徒がいることが分かった。しかし、多くの生徒が分類に関する特徴に触れていなかったり、関係のない特徴を書いていたり、根拠を記述していなかったりするなど、記述の仕方に差が見られた。



【資料６　問１ワークシート】



【資料７　問１に対する生徒の記述】

(ｲ) 書き方のモデルの提示及び自己評価・相互評価の場面

イヌとネコに関する課題について自分の書いたものを自己評価させるために、資料８に示す書き方のモデルを掲示し、イヌとネコの分類に必要な情報を含む具体的な記述になっていることを確認させた。その際、資料９に示した書き方のポイントも併せて掲示し、書き方のモデルと対比させながら説明を行った。説明の後、自分の記述したものを読み返して自己評価させた。自己評価では、評価シートに示した評価基準（資料 10）を用い、自分の書いたものと書き方のポイントについて４段階で評価させた。

どちらもさわると温かく、体表は毛でおおわれ、子を産み、肺で呼吸をしている。

このことから、どちらもほ乳類の特徴をもつので、イヌとネコは同じなかまと考えることができる。

【資料８　書き方のモデル】

書き方のポイント

①結論がはっきりと書いてある。

②必要な特徴（呼吸、ふえ方、体温、体表）がすべて書いてある。

③分かりやすい文章で書いてある。

【資料９　書き方のポイント】

①～③について、下の基準で評価してください。また、気付いたことについては、良い点や改善するともっと良くなる点について書いてください。

４：よい　３：だいたいよい　２：あまりよくない　１：よくない

【資料 10　評価のポイントと評価基準（評価シートからの抜粋】

自己評価の後、グループ内で他の生徒の記述を評価し合う場面を設定した。評価基準は自己評価と同じものを用い、自己評価の要領で他の生徒の記述を４段階で評価させた。また、気付いたことをグループ内で評価し合うことにより、自分のよい点や改善すべき点を明確にし、次の課題に生かせるようにした。

【資料 11　相互評価のようす】

評価	気付いたこと
①（4　3　2　1）	
②（4　3　2　1）	
③（4　3　2　1）	
①（4　3　2　1）	
②（4　3　2　1）	
③（4　3　2　1）	

【資料 12　相互評価シートへの記述】

この活動により、資料 11 のようにグループ内でお互いの書いたものを読みながら積極的にかかわろうとする姿や、資料 12 のような気付きが見られた。ただし、相互評価を行うことにあまり慣れていない生徒にとって、書き方のポイントと照らし合わせながら、他の生徒が書いた文章を評価したり、コメントを書いたりすることは難しく、時間が足りずに十分なアドバイ

スを書くことが難しい生徒も見られた。

(ｳ) 書き方のモデル及び相互評価を生かして課題に取り組む場面

書き方のモデルの説明および相互評価の後､動物の分類が理解できているのかを見るために、スズメとコウモリが同じなかまになるのか、違うなかまになるのかについて考え、自分の考えを記述する場面を設定した。ここでは、見た目（翼がある）や行動の様子（空を飛ぶ）で判断するのではなく、資料 13 を基に考えさせた。情報には動物の分類には直接関係のないものもあえて含め、分類を決定するために必要なものだけを取り出し、既習事項と照らし合わせながら判断させるものとした。自分の考えを記述する際には、書き方のモデルに合ったポイントと相互評価で他の生徒からもらったアドバイスを意識しながら記述させた。

問２：スズメとコウモリは同じなかまか、違うなかまか判断しよう。

資料

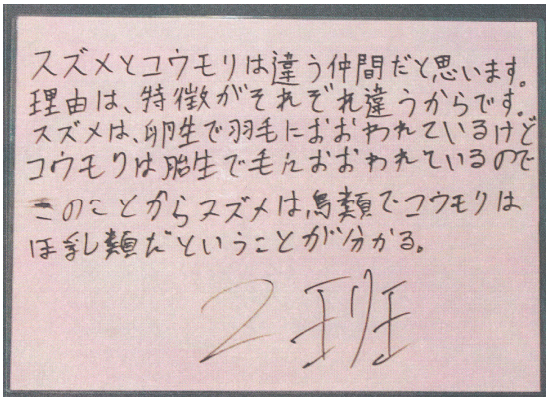
	スズメ	コウモリ
生活の場所	陸上（空を飛ぶ）	陸上（空を飛ぶ）
活動場所	昼間活動する。	夜行性で超音波を出してえさの位置をとらえるものもいる。
なかまのふやし方	殻のある卵を陸上に産む（卵生）	子を産む（胎生）
呼吸の仕方	肺呼吸	肺呼吸
えさ	植物の種子や虫を食べる。	植物（主に果物）や虫を食べる。
体温	恒温動物	恒温動物
体表	羽毛でおおわれている	毛でおおわれている
その他	人の住む地域でごくふ普通に見られる。	後ろ足が弱く立つことができないので、ぶら下がって休む。

【資料 13　課題を解決するための情報】

この活動の中で、必要な情報を取り出して判断しようとする生徒の姿を見ることができた。（生徒の変容等は後述の「エ　授業の分析と考察」で述べる）

個人で考え、その考えを文章で表現させた後、個人の考えをグループでまとめて全体発表を行う場面を設定した。発表を行うに当たり、自分の書いたものを基に話合いを行い、グループの意見としてまとめさせてホワイトボードに記述させた。それぞれのグループにおいて、資料 14 のように自分が書いたものを基にスズメとコウモリについて正しい判断ができているかを確認し合う姿や、分かりやすく伝わるように表現を工夫しながらホワイトボードに記入する姿を見ることができた。資料 15 は、各班が発表に向けてホワイトボートに記入したものの一つである。ホワイトボードへの記述と書き方のモデルを比較したとき、結論を先に書いているか後に書いているかの違いはあるものの、①結論がはっきりと書いてあるか、②必要な特徴がすべて書いてあるか、③分かりやすい文章で書いてあるかという書き方のポイントに挙げた３つの点を満たしたものになっていると判断した。（詳細は「エ　授業の分析と考察」で述べる）

【資料 14　グループで話し合う様子】



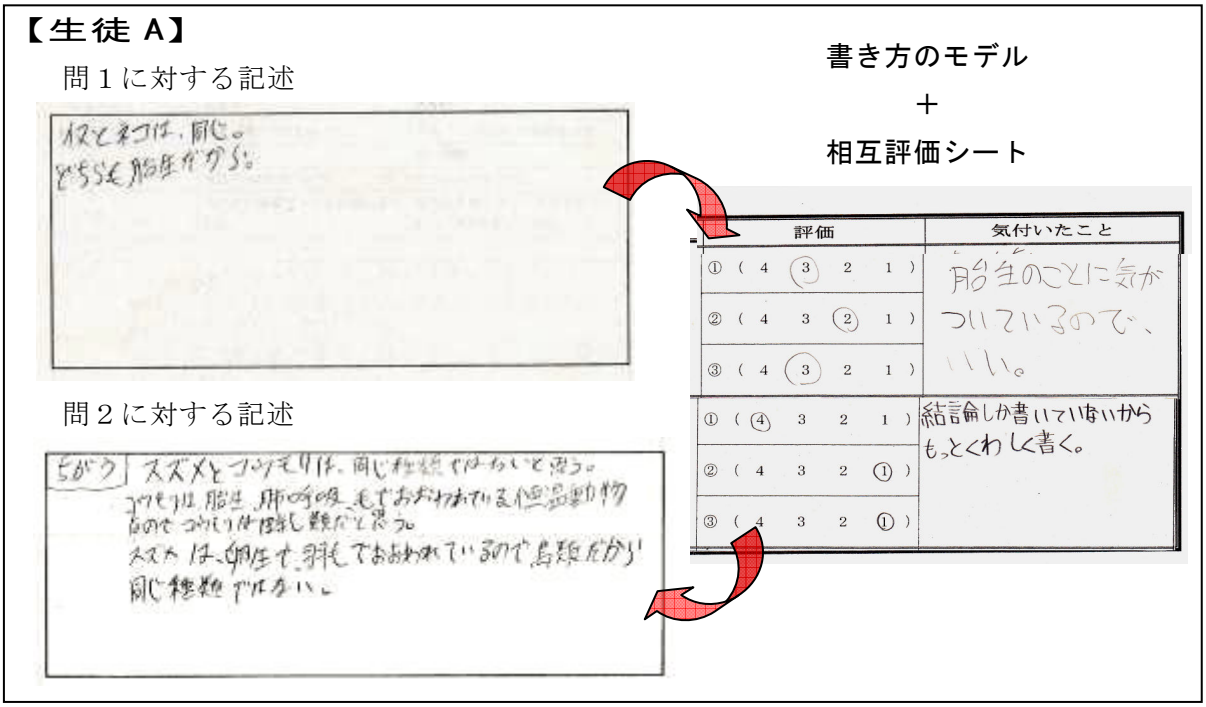
【資料 15　ホワイトボードへの記述】

授業のまとめの段階では、学習内容である動物の分類に必要な視点を確実に踏まえているかを再度確認するために、クジラに関する情報を提示して、必要な情報を基に動物の分類を行う場面を設定した。この活動を行ったことにより、本時の目標であるせきつい動物の特徴に関する情報から必要なものを用いて、同じなかまか違うなかまかを判断することができたかを確認することができた。

エ　授業の分析と考察

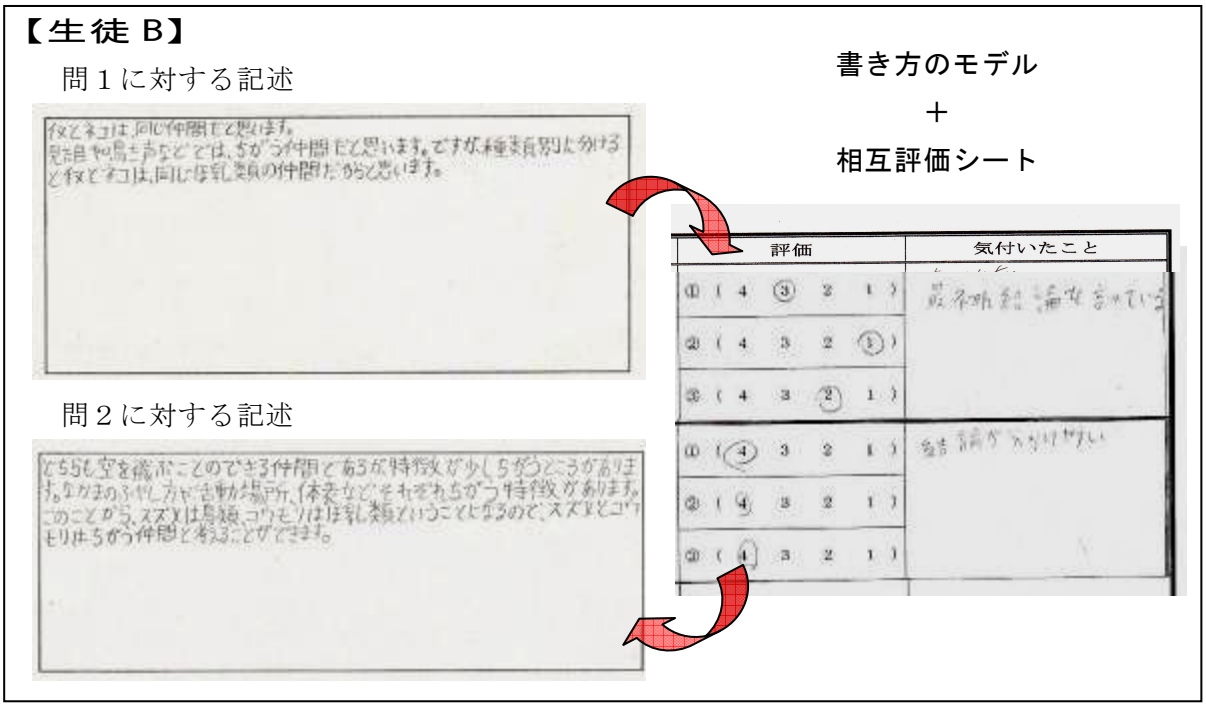
生徒の書き方の変容をワークシートの記述から判断したところ、書き方のモデルやそれを基にした自己評価及び相互評価の場面設定の２つの手立てを行うことにより、１４名中７名の生徒に記述の変容が見られた。変容が見られた生徒（生徒Ａ及びＢ）と変容が見られなかった生徒（生徒Ｃ及びＤ）について例を示す。

(7) 変容が見られた生徒



【資料 16　生徒Ａの記述】

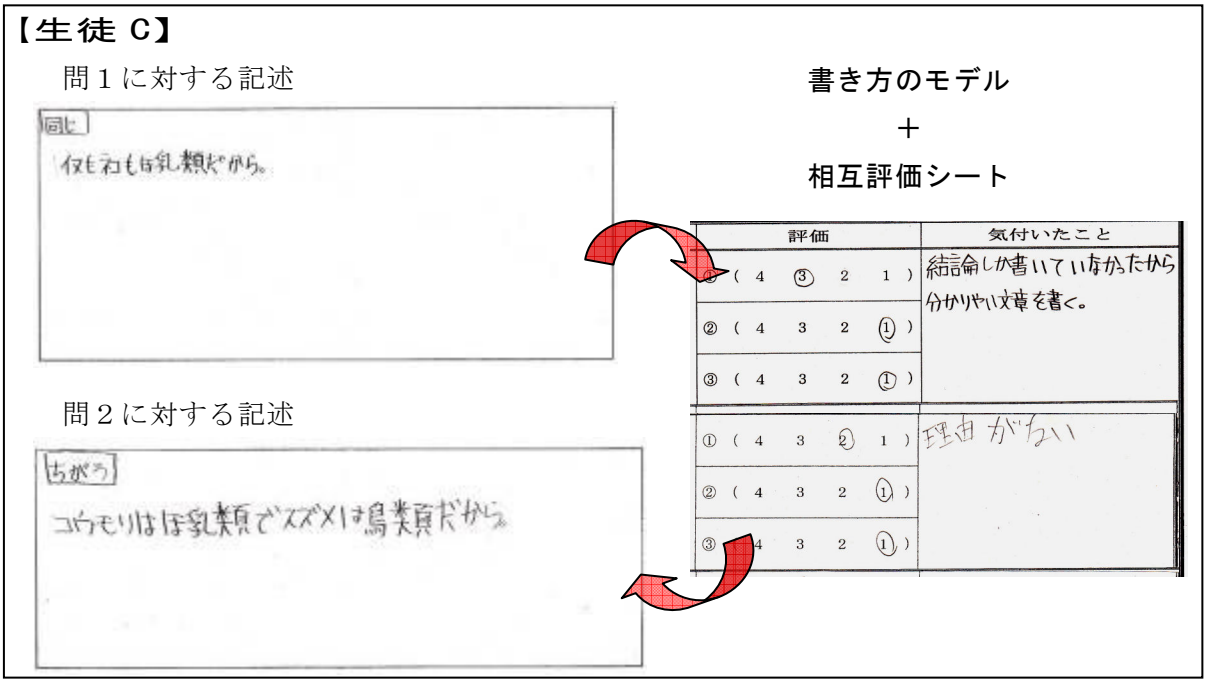
資料 16 に示した生徒Ａの記述をみると、問１では結論に対する理由が１つしか書かれていなかったが、問２では分類に必要な特徴の項目が増え、判断した根拠がよりはっきり書かれていた。よって、書き方のモデルと相互評価によって記述に変容が見られたと考えた。



【資料 17　生徒Ｂの記述】

資料 17 に示した生徒Ｂの記述に対して、問１に対する記述に「結論が分かりやすい」とよい評価をする生徒がいる一方、分類に必要な特徴に関する記述が少ないために、説明不足と判断し②や③の項目に対して低い評価をする生徒もいた。問２では分類に必要な項目にふれてしっかり書けるようになっているので、モデルと相互評価によって変容が見られたと考えた。

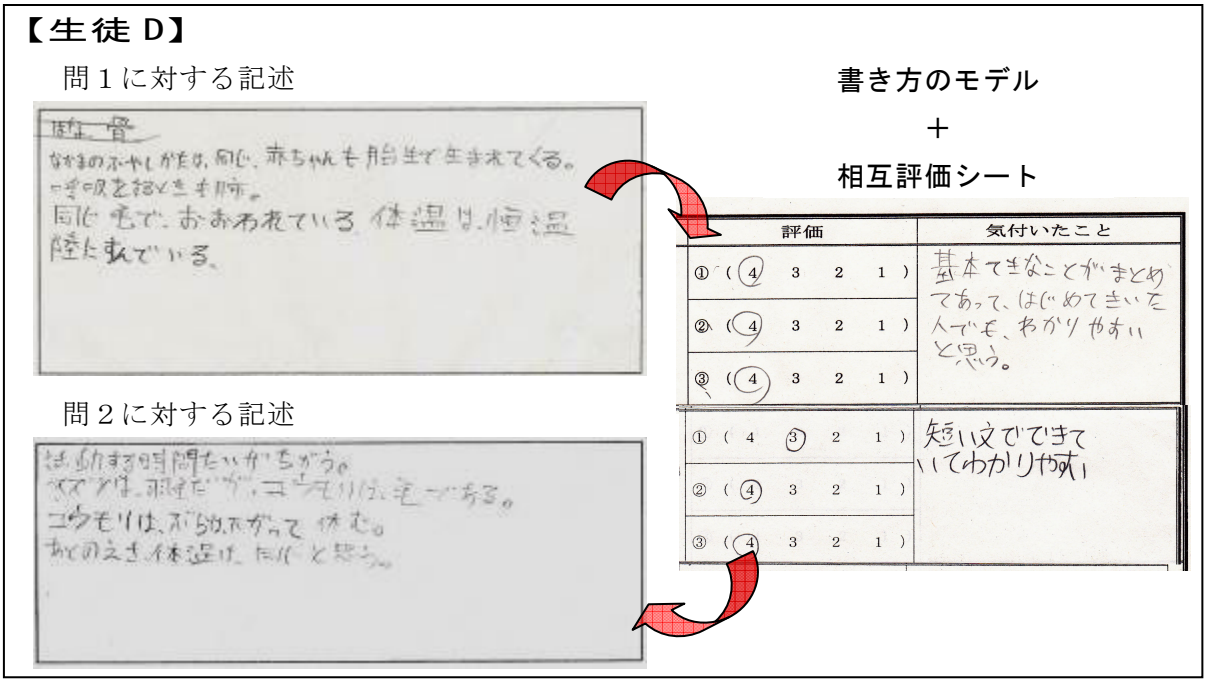
(ｲ) 変容が見られなかった生徒



【資料 18　生徒Ｃの記述】

資料 18 に示した生徒Ｃの記述を見ると、自己評価の時点で結論に対する理由の記述が無い

ことに自分で気付き、自身で改善の必要性を感じていたり、相互評価でも理由が述べられていないことについて指摘を受けたりしていたが、記述の変化は見られなかった。問１、問２ともに正答を得ることができているので動物の分類については正しい判断ができているのではないかと見ることができるが、生徒に書き方のモデルをどのように参考にさせるか等、生徒が自分の考えを分かりやすく説明できるようになるための教師の手立てに課題が残ると考えた。

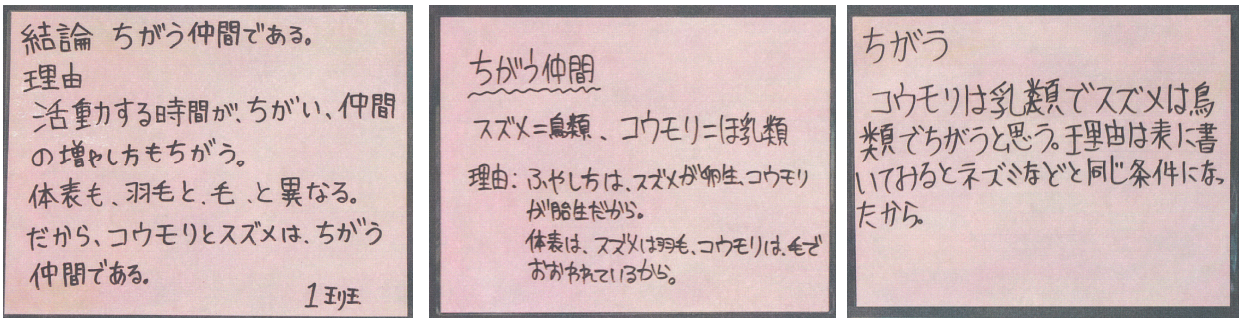


【資料 19　生徒Ｄの記述】

資料 19 の生徒Ｄの記述は、モデルの提示前後で箇条書きのスタイルが変化しなかった例である。相互評価シートには、短い文を好評価する記述があり４段階評価も高かった。このことからスタイルが変化しなかったのではないかと考えた。今回は書き方のモデルで示したように文章で自分の考えを記述することをねらいとしていたが、「箇条書きで書く」ことは、ポイントをまとめるという点では分かりやすい表現方法の一つであるといえる。

(ｳ) グループでの発表

全体発表に向けてグループで話合いを行い、ホワイトボードに記述させると、資料 20 に示したように書き方のモデルに近い表現が見られた。このことから、「分かりやすい文章」の認識について生徒と教師の認識の差があるのではないか、また、ホワイトボードの記述は口頭発表を前提としたものが求められたため、書く目的の違いによって表現が変わったのではないかと考察される。言い換えれば、分かりやすく人に説明する（話す）という場面を設定することでモデルを参考に書こうとする意識をもたせることができるのではないかと考えることができる。



【資料 20　ホワイトボードの記述】

オ　成果と第２回検証授業に向けての改善点

(ｱ) 成果

○　書き方のモデルは、分類に必要な情報を比較したり既習事項と情報を関連付けたりしたことを文章でまとめる場面において、生徒に分かりやすい表現を具体的に示す有効な手立てになった。

○　相互評価の場面を設定することで、自分のよさを見つけるとともに、他の生徒からもらったアドバイスを生かしてより分かりやすく表現しようとする姿を見ることができた。

(ｲ) 改善点

○　書く「目的」の明確化により書き方が変わることが分かったことから、文章を書かせる際には「分かりやすく説明する」ための具体的な場面を設定する必要がある。

○　書き方のモデルの活用について、生徒が書き方のモデルを利用して書きたいと思うような指導の工夫や説明が必要である。

○　相互評価をさせる前に、書き方のポイントを視覚的につかませ、まずは自己評価により評価の視点に沿った振り返りを客観的に行わせ、これを基に他の生徒に対してより適切な評価ができるようにする必要がある。

(2) 授業実践例②（小学校第６学年　体育科）

ア　検証授業の考え方

単元名	病気の予防
単元の目標	○　病気の起こり方や予防の仕方に関心をもつとともに、自分の生活を振り返り、学んだことを日常生活に生かそうとすることができる。（関心・意欲・態度） ○　病気が起こる原因や自分なりの予防の仕方を考え、その考えを文章で表現することができる。（思考・判断・表現） ○　病気は、病原体、からだの抵抗力、生活行動、環境が関わり合って起こることを知り、それぞれについての予防の仕方を理解することができる。（知識・理解） ○　喫煙、飲酒、薬物乱用が健康を損なう原因になることを理解することができる。（知識・理解）
本時の目標	病原体がもとになって起こる病気の予防には、病原体を体の中に入れないこと、病原体をなくすこと、体の抵抗力を高めることが必要なことを理解することができる。
問われているカ	目的や意図に応じて、必要な情報を関連付けて読み、理由を明確にして説明する力
書き方のモデルの作成と活用	病原体がもとになって起こる病気の予防について、資料を基に考え、考えを友だちに説明する目的で、説明原稿を書く時、次の３つが書き方のポイントとなると考えた。 ①　予防の仕方（病原体を体の中に入れないこと、体の抵抗力を高めること）が書いてあるか。 ②　感染の仕方（その予防の仕方が必要な理由）が書いてあるか。 ③　他の人が分かりやすい文章になっているか。 この書き方のポイントを踏まえ、児童に提示する書き方のモデル（具体的なモデルは後述する）を作成した。授業では、まず、事前に書いた「インフルエンザの予防の仕方」についての考えを、書き方のモデルで書き方のポイントを押さえながら、自己評価させた。その際、資料からどのような情報を取り出し、どのように考えを文章化したらよいか（どうしたら分かりやすい説明になるか）ということについても考えさせた。そして、その後、「食中毒の予防の仕方」についての自分の考えを資料を基に書かせた。書き方のポイントをしっかり意識して書かせたり、モデルを真似て書かせたりすることによって、「目的や意図に応じて、必要な情報を関連付けて読み、理由を明確にして説明する力」を高めたいと考えた。
相互評価の在り方	「インフルエンザの予防の仕方」について、自分の考えを書いた文章を、書き方のポイントを評価の視点として自己評価させた後、同じ評価の視点で相互評価させた。評価に当たっては、友だちの文章でよかったことを中心に感想を書き、もう少しだと思う点は、アドバイスというかたちで記述させた。 そして、その後、「食中毒の予防の仕方」についての考えを、自己評価や相互評価を生かして書かせることによって、「目的や意図に応じて、必要な情報を関連付けて読み、理由を明確にして説明する力」を高めたいと考えた。

イ　学習指導過程

学習内容及び学習活動	パターンＡ
【事前】インフルエンザの予防の仕方について、２つの資料を基に考え、自分の考えを友だちに説明するための発表原稿を文章で書く。 1　病原体がもとになって起こる病気にはどのような病気があるかを知る。 2　インフルエンザ、おたふくかぜ、食中毒について知る。 3　本時のめあてをつかむ。 病原体がもとになって起こる病気の予防の仕方を考えよう。 4　病原体がもとになって起こる病気の予防の仕方について知る。 ○　病原体を体の中に入れない。 ○　病原体をなくす。 ○　体の抵抗力を高める。 5　事前に書いたインフルエンザの予防の仕方について振り返る。（書き方のモデルと比較した自己評価） ○　予防の仕方（病原体を体の中に入れないこと、体の抵抗力を高めること）が書いてあるか。 ○　感染の仕方（その予防の仕方が必要な理由）が書いてあるか。 ○　他の人が分かりやすい文章になっているか。 6　インフルエンザの予防の仕方について書いたものを相互評価する。 ○　自己評価と同じ評価の視点で 7　現在の残暑厳しい時期に注意しなければならない病気は何かを資料を基に調べる。（細菌性の食中毒） 8　細菌性食中毒の予防の仕方について自分なりの考えを書く。 ○　友だちに説明する目的をもって ○　書き方のモデルや自己評価、相互評価を生かしたり書き方のポイントを意識したりして 9　グループで自分の考えを紹介し合う。 10　細菌性食中毒の予防の仕方についてまとめる。 ○　感染の仕方 ○　予防の仕方 11　本時の学習について振り返る。	今もっている力で、情報を基に、目的に応じて、考えを文章で書く。 目的に応じた書き方のモデルを見ながら自己評価する。 自己評価と同じ視点をもって相互評価する。 書き方のモデル、自己評価、相互評価を生かし、書くポイントを意識して、情報を基に、考えを文章で書く。 友だちに自分の考えがしっかり伝わっているかを考えながら説明する。

ウ　授業の記録

(ｱ) インフルエンザの予防の仕方について、資料を基にした考えの記述（事前の活動）

今回の授業において高めたい力である「目的や意図に応じて、必要な情報を関連付けて読み、理由を明確にして説明する力」について、「目的」、「必要な情報を関連付けて読む」、「理由を明確にする」を次のようにとらえた。

目　的	友だちに説明するための発表原稿を書く。
必要な情報を関連付けて読む	２つの資料を使い、病気に応じて、必要な予防の仕方（病原体を体の中に入れないこと、病原体をなくすこと、体の抵抗力を高めること）を選び記述すること。
理由を明確にする	その予防が必要な理由として、感染の仕方にふれること。

そして、授業前の「目的や意図に応じて、必要な情報を関連付けて読み、理由を明確にして説明する力」の実態を把握するために、資料 21、資料 22 を基に、インフルエンザの予防の仕方について、自分の考えを記述させた。

記述に当たっては、両方の資料を活用するという条件を出し、予防の仕方を友だちに説明する場面での発表原稿を書くという目的をもって書かせた。

【資料】病原体がもとになって起こる病気

病　名	病原体	感染の仕方	流行する時期
インフルエンザ	インフルエンザ ウィルス （しっけに弱い）	○　かかった人のくしゃみやせきで、空気中に出たウィルスが、知らないうちに体の中に入ってきてうつる。	１２月ごろ から ２月ごろ
おたふくかぜ	おたふくかぜ ウィルス （効く薬はない）	○　かかった人のくしゃみやせきで、空気中に出たウィルスが、知らないうちに体の中に入ってきてうつる。 ○　かかった人とのせっしょくによってうつる。	特にはやりやすい時期はない
食中毒	O（オー）－１５７等の細きん （熱に弱い）	○　よごれた手に付いている細きんが体の中に入ったり、食べ物の中にいる細きんが、食べ物を食べた時に体に入ったりする。	５月ごろ から １０月ごろ

【資料 21　病原体がもとになって起こる病気の例】

【資料】病原体がもとになって起こる病気の予防の仕方

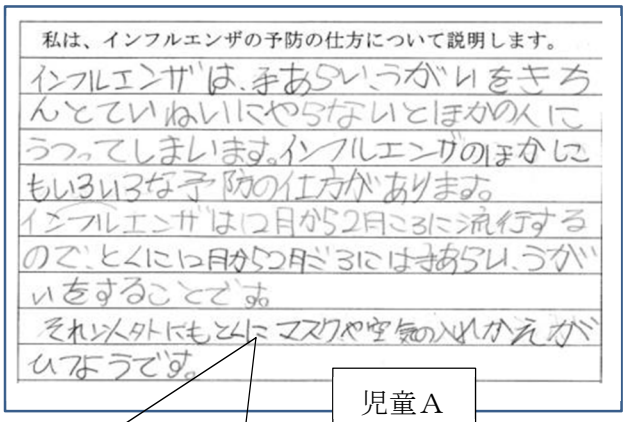
① 病原体を体の中に入れない
例　・うがいをする　・石けんを使って手を洗う
　　・空気の入れかえをする　・マスクをつける
　　・新せんな食品を食べる

② 病原体をなくす
例　・日光で消毒する　・道具などを加熱して消毒する
　　・道具や場所を薬品を使って消毒する
　　・食品を加熱して食べる

③ 体のていこう力を高める
例　・食事をしっかりとる　・適度な運動をする
　　・十分な休養とすいみんをとる　・予防接種をする

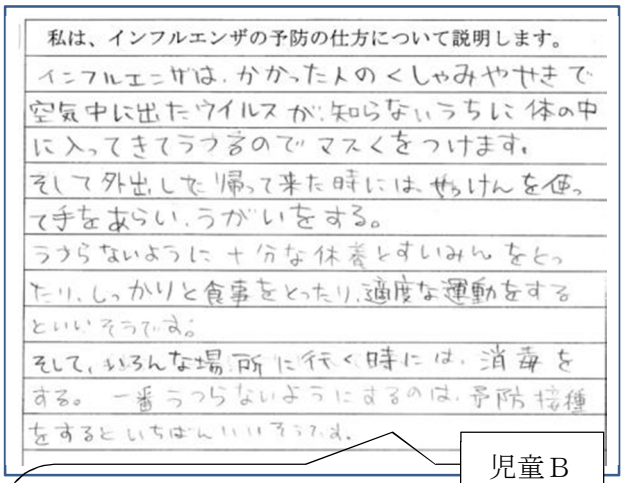
【資料 22　病原体がもとになって起こる病気の予防の仕方の例】

児童が書いた文章を基に、授業前の「目的や意図に応じて、必要な情報を関連付けて読み、理由を明確にして説明する力」を分析してみると、全３２名中、高いと判断される児童が５名、若干十分でない点があると判断される児童が１３名、十分でないと判断される児童が１４名いることが分かった。（この判断については、児童が書いた文章を得点化した分析に基づく。得点化した分析については、後述の、「エ　授業の分析と考察」のところで述べる。）十分でないと判断された児童の記述には、資料 23 のようなものがあった。


私は、インフルエンザの予防の仕方について説明します。
インフルエンザは、まあらいうがいをきちんとていねいにやらないとほかの人にうつってしまいます。インフルエンザのほかにもいろいろな予防の仕方があります。
インフルエンザは12月から2月ごろに流行するので、とくに1月から2月ごろにはまあらいうがいをすることです。
それ以外にもとくにマスクや空気の入れかえがいいようです。

児童Ａ

- 予防の仕方を具体的に書いている。しかし、病原体を体の中に入れないこと、病原体をなくすこと、体の抵抗力を高めることが書かれていない。
- その予防策が必要な理由である感染の仕方が書いていない。
- 一つ一つの話す内容が短く、話題がすぐ変わり、発表原稿としては、分かりやすい文章とは言い難い。


私は、インフルエンザの予防の仕方について説明します。
インフルエンザは、かかった人のくしゃみやせきで空気中に出たウイルスが、知らないうちに体の中に入ってきてうつるので、マスクをつけます。
そして外出したり帰って来た時には、せっけんを使って手をあらいうがいをする。
うつらないように十分な休養とすいみんをとったり、しっかりと食事をとったり、適度な運動をするといいそうです。
そして、いろんな場所に行く時には、消毒をする。一番うつらないようにするのは、予防接種をするといちばんいいそうです。

児童Ｂ

- 予防の仕方を具体的に書いている。しかし、病原体を体の中に入れないこと、病原体をなくすこと、体の抵抗力を高めることが書かれていない。
- 休養や睡眠、予防接種が体の中に病原体を入れない予防策だとしている。
- 話題がすぐ変わり、発表原稿としては、分かりやすい文章とは言い難い。

【資料 23　児童が記述した文章の例】

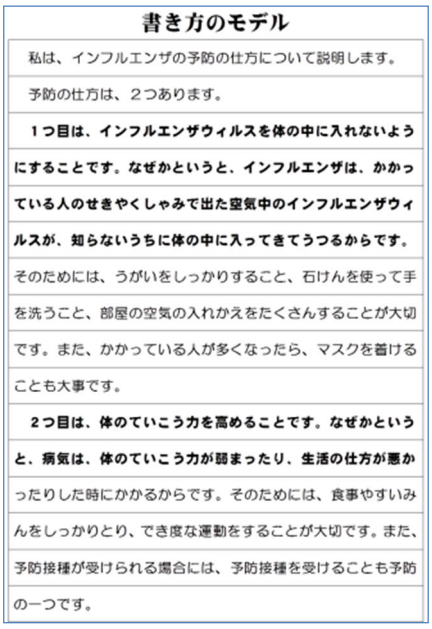
検証授業では、学級全体としての変容だけでなく、事前調査で特に十分でないと判断されたこの２名の児童を抽出して見ていくことにした。

(ｲ) 書き方のモデルを活用した自己評価と相互評価

本時の学習においては、まず、病原体がもとになって起こる病気にはどのような病気があるのか、病気の予防のためには、「病原体を体の中に入れないこと」、「病原体をなくすこと」、「体の抵抗力を高めること」の３つが大事であることを理解させた。

その後、授業までに、自分がインフルエンザの予防の仕方についてどれくらい理解していたかを振り返らせる目的で、事前に記述した、インフルエンザの予防の仕方についての文章を読ませた。

文章を読ませる際には、この文章を書くときに提示した、２つの資料を使っているか、友だちに説明するための発表原稿になっているかを確認しながら読ませた。


書き方のモデル

私は、インフルエンザの予防の仕方について説明します。

予防の仕方は、２つあります。

１つ目は、インフルエンザウィルスを体の中に入れないようにすることです。なぜかというと、インフルエンザは、かかっている人のせきやくしゃみで出た空気中のインフルエンザウィルスが、知らないうちに体の中に入ってきてうつるからです。

そのためには、うがいをしっかりすること、石けんを使って手を洗うこと、部屋の空気の入れかえをたくさんすることが大切です。また、かかっている人が多くなったら、マスクを着けることも大事です。

２つ目は、体のていこう力を高めることです。なぜかというと、病気は、体のていこう力が弱まったり、生活の仕方が悪かったりした時にかかるからです。そのためには、食事やすいみんをしっかりとり、でき度な運動をすることが大切です。また、予防接種が受けられる場合には、予防接種を受けることも予防の一つです。

【資料 24　書き方のモデル】

児童が文章を読み返した後、資料 24 の書き方のモデルを示した。そして、書き方のポイントとして、次の３点を示した。

①　予防の仕方（病原体を体の中に入れないこと、体の抵抗力を高めること）が書いてあるか。 ②　感染の仕方（その予防の仕方が必要な理由）が書いてあるか。 ③　他の人が分かりやすい文章になっているか。

その後、自分が書いた文章について自己評価させた。自己評価の例として、前述の抽出児童２名（児童Ａ、児童Ｂ）の自己評価を資料 25 に示す。

（児童Ａ）

評価すること	評　価（あてはまるものに○をつけましょう）	
「病原体を体の中に入れないこと」と「体のていこうカを高めること」が書いてあるか。	どちらも書いてある。	
	片方しか書いていない。	○
	どちらも書いていない。	
予防が必要な理由である感染の仕方が書いてあるか。 ＊かかった人のくしゃみやせきで空気中のウィルスが、知らないうちに体の中に入ってくること	しっかり書いてある。	
	書いてあるが十分でない。	○
	書いていない。	
人に分かりやすい説明になっているか。	分かりやすい。	
	少し分かりにくいところがある。	
	分かりにくい。	○

（児童Ｂ）

評価すること	評　価（あてはまるものに○をつけましょう）	
「病原体を体の中に入れないこと」と「体のていこうカを高めること」が書いてあるか。	どちらも書いてある。	
	片方しか書いていない。	○
	どちらも書いていない。	
予防が必要な理由である感染の仕方が書いてあるか。 ＊かかった人のくしゃみやせきで空気中のウィルスが、知らないうちに体の中に入ってくること	しっかり書いてある。	
	書いてあるが十分でない。	○
	書いていない。	
人に分かりやすい説明になっているか。	分かりやすい。	
	少し分かりにくいところがある。	
	分かりにくい。	○

【資料 25　自己評価カードの例】

自己評価では、この２名の児童に見られるように、教師の分析に比べ、若干甘く評価している児童が多かった。しかし、書き方のポイントを評価の視点としてしっかり意識して評価することはできており、それは相互評価の充実につながったと言える。

自己評価が終わった後、３名のグループで相互評価をさせた。相互評価では、検証授業①で出てきた、評価項目が多すぎ、時間がかかり過ぎたという課題を踏まえ、資料 26 のような、良い点やアドバイスを簡単に文章で記述する自己評価カードを使った。

保健学習　　相互評価カード

[　　]へ　[　　]より

友だちの書いた文章に対して、視点をもとに、書き方で上手だなと思うこと、もっとよい説明になるようなアドバイスを書いてあげよう。

視　点	上手だなと思った点やアドバイス
「病原体を体の中に入れないこと」と「体のていこうカを高めること」が書いてあるか。	
予防が必要な理由である感染の仕方が書いているか。 ＊　かかった人のくしゃみやせきで空気中のウィルスが、知らないうちに体の中に入ってくること	
読んで分かりやすかったか。	

【資料 26　相互評価カード】

相互評価では、自己評価で評価の視点をしっかりもてたことにより、資料 27 のように、よいところを適切に見付けたり、適切なアドバイスを書いたりできた児童が多く見られた。

上手だなと思った点やアドバイス

・マスクを付けたほうがいいと書いてあったのは、いいと思いました。

・インフルエンザの予防のことなのに、口ていえきの話になったのが少し、残念でした。

上手だなと思った点やアドバイス

感染の仕方が、書いてあったから良かったと思った。
でも、ていこうカを高めることが書いてなかったから、書いた方がいいと思います。
読んで分かりやすかったと思います。

【資料 27　相互評価カードの例】

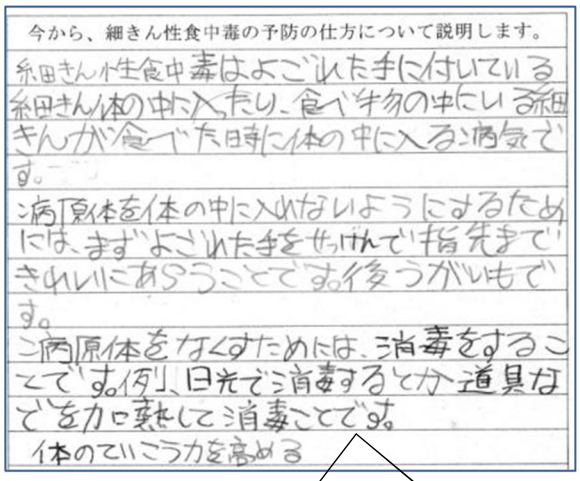
(ｳ) 書き方のモデル、自己評価、相互評価を生かした記述

前述の相互評価が終わった後、資料 21 を基に、今の時期（９月初旬）に気を付けなければならない病気が何かを考えさせた。すると、児童は、はやりやすい時期の中から情報をしっかりと取り出し、「食中毒」であると考えた。

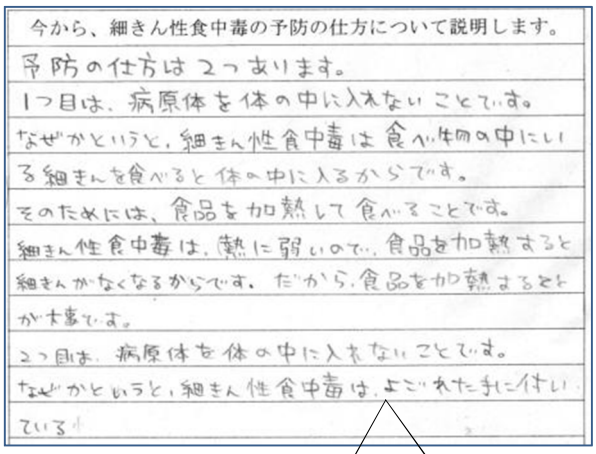
そして、事前調査と同様に、資料 21 と資料 22 の両方を使い、友だちに説明するための発表原稿を書く目的で、「食中毒」の予防の仕方について、自分の考えを記述させた。

記述の際には、書き方のモデルや自己評価、相互評価でのアドバイスを生かして書くように指示をした。すると、児童からは、懸命に資料から必要な情報を取り出し、書き方のモデルを真似ようとしたり、自己評価や相互評価を生かしたりして記述しようとする姿が見られた。記述した例として、前述の抽出児童２名のものを資料 28 に示す。

（児童Ａ）


今から、細きん性食中毒の予防の仕方について説明します。
細きん性食中毒はよごれた手に付いている細きん体の中に入ったり、食べ物の中にいる細きんが食べた時に体の中に入る病気です。
病原体を体の中に入れないようにするためには、まずよごれた手をせっけんで指先まできれいにあらうことです。後うがいもです。
病原体をなくすためには、消毒をすることです。例、日光で消毒すると分道具などを加熱して消毒することです。
体のていこう力を高める

（児童Ｂ）


今から、細きん性食中毒の予防の仕方について説明します。
予防の仕方は２つあります。
１つ目は、病原体を体の中に入れないことです。
なぜかというと、細きん性食中毒は食べ物の中にいる細きんを食べると体の中に入るからです。
そのためには、食品を加熱して食べることです。
細きん性食中毒は、熱に弱いので、食品を加熱すると細きんがなくなるからです。だから、食品を加熱することが大事です。
２つ目は、病原体を体の中に入れないことです。
なぜかというと、細きん性食中毒はよごれた手に付いている。

- 予防の仕方（病原体を体の中に入れないこと、病原体をなくすこと、体の抵抗力を高めること）と感染の仕方がしっかりと書けている。
- 事前調査【資料 23】に比べ、分かりやすい発表原稿になっている。

- 予防の仕方（病原体を体の中に入れないこと、病原体をなくすこと、体の抵抗力を高めること）と感染の仕方がしっかりと書けている。
- モデルを真似て、分かりやすく書こうとする態度が見える。

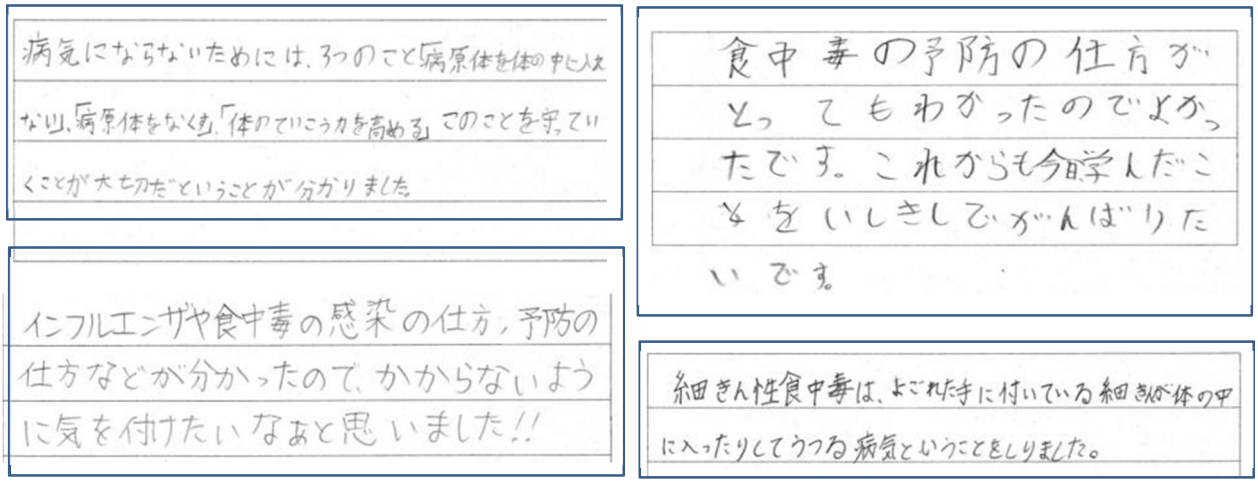
【資料 28　食中毒の予防の仕方について記述したワークシート】

この２名は、上記の文章を書くのにやや時間がかかり、途中で終わってしまっている。しかし、続けていればすばらしい発表原稿になっていたと推察された。また、事前調査で書いた文章と比較すると、その変容は著しかった。その他の児童についても、予防の仕方や感染の仕方がしっかりと書かれていたり、より分かりやすい発表原稿になっていたりする児童が多かった。

その後、本時で学習した「病気の予防の仕方」についての理解を深めさせる目的で、資料 29 のように自分の考えをグループで紹介し合う活動を行わせた。この活動では、発表原稿を基に、自分の考えを「目的や意図（友だちに説明する）に応じて、必要な情報を関連付けて読み（病気の予防の仕方）、理由（感染の仕方）を明確にして」話そうとする姿がよく見られた。

【資料 29　考えを発表し合う児童】

また、授業の終末で書かせた振り返りカードでは、その例を示した資料 30 のように、全員が本時の目標についての感想を書いていた。


病気にならないためには、3つのこと「病原体を体の中に入れない」、「病原体をなくす」、「体のていこうかを高める」このことを守っていくことが大切だということが分かりました

食中毒の予防の仕方がとってもわかったのでよかったです。これからも今日学んだことをいしきしてがんばりたいです。

インフルエンザや食中毒の感染の仕方、予防の仕方などが分かったので、かからないように気を付けたいなぁと思いました!!

細きん性食中毒は、よごれた手に付いている細きんが体の中に入ったりしてうつる病気ということをしりました。

【資料 30　児童の振り返りカード】

このことから、本時の授業では、「目的や意図に応じて、必要な情報を関連付けて読み、理由を明確にして説明する」ための文章を書く言語活動は、本時の目標を達成するための有効な手立てになったと考える。

エ　授業の分析と考察

事前に書いた文章（インフルエンザの予防の仕方）と、本時で書いた文章（食中毒の予防の仕方）を、２つ資料（資料 21 と資料 22）から必要な情報を取り出し、「感染の仕方」を書いているか、「病原体を体の中に入れない」、「病体をなくす」、「体の抵抗力を高める」というキーワードを使って予防の仕方を書いているか、説明するための分かりやすい発表原稿になっているかという視点で点数化した評価を行った。評価においては、資料 31 のような評価基準で評価した。

規　準	点数	評　価　基　準
「病原体を体の中に入れない」、「病原体をなくす」、「体の抵抗力を高める」の３つの言葉を使って書いているか。	３点	３つとも書いている。
	２点	２つを書いている。
	１点	１つ書いている。または、１つも書いていない。
感染の仕方にふれているか。	３点	空気感染であること、知らないうちに体に入ってくることの両方にふれている。
	２点	空気感染であること、知らないうちに体に入ってくることのどちらか一方にふれている。
	１点	どちらにもふれていない。
説明するための分かりやすい発表原稿になっているか。	３点	発表原稿になっており、接続語を上手に使って、分かりやすい文章になっている。
	２点	発表原稿になっているが、やや分かりにくい。
	１点	発表原稿になっていない。または、分かりにくい。

【資料 31　児童が書いた文章を分析する評価基準】

また、「書き方のモデル」と「相互評価」が、本時で書いた文章に生かされたか（有効性を発揮したか）については、資料 32 のような判断規準で有効性が発揮されたと判断した。

書き方のモデル	○　書き方のモデルで示した、書き方のポイントを意識して、それを文章に取り入れようとしている。 ○　書き方のモデルに示された、分かりやすく説明するための文章の書き方を参考にしようとしている。
相 互 評 価	○　友だちが自分に書いたよい点やアドバイスを自分の文章に生かそうとしている。 ○　自分が友だちに書いたよさやアドバイスを、自分の文章に生かそうとしている。

【資料 32　書き方のモデルと相互評価が有効性を発揮されたかの判断規準】

以上のような評価基準と有効性の判断規準を基に、児童が書いた文章の変容と、書き方のモデル及び相互評価の有効性を分析すると、資料 33 のような結果になった。

	予防の仕方の３つが書いてあるか。		感染の仕方について書いているか。		分かりやすい文章か。		合計点数 ９点満点		有効性		備　考
番号	事前調査	授業後	事前調査	授業後	事前調査	授業後	事前調査	授業後	モデル	相互評価	
1	3	3	3	3	3	3	9	9	○	○	
2	1	3	2	3	2	3	5	9	○	○	
3	1	2	2	2	1	1	4	5	○		
4	1	2	3	3	2	3	6	8	○	○	
5	1	欠	1	欠	1	欠	3	欠			
6	1	2	2	3	1	1	4	6			
7	1	1	1	1	1	1	3	3			
8	3	3	3	3	3	3	9	9	○	○	
9	1	2	1	3	1	2	3	7			
10	1	2	1	3	1	3	3	8	○	○	
11	3	2	1	1	1	1	5	4	○		
12	2	2	3	3	2	2	7	7	○	○	
13	3	3	3	3	1	2	7	8	○	○	
14	2	1	3	3	2	1	7	5		○	
15	3	2	1	3	1	2	5	7	○	○	
16	3	2	1	2	2	2	6	6	○		
17	1	3	3	2	2	3	6	8	○	○	
18	3	3	3	3	2	3	8	9	○	○	
19	3	2	3	1	2	2	8	5			
20	1	2	2	3	1	3	4	8	○	○	児童Ｂ
21	1	2	2	3	1	1	4	6			
22	1	3	2	3	1	1	4	7		○	
23	1	2	1	3	1	3	3	8	○	○	児童Ａ
24	2	3	2	3	1	3	5	9	○	○	
25	3	3	2	3	1	2	6	8	○	○	
26	3	3	3	3	3	3	9	9	○	○	
27	2	2	2	3	1	1	5	6			
28	欠	3	欠	2	欠	3	欠	8	○	○	
29	1	3	2	2	1	2	4	7	○	○	
30	3	3	1	3	2	3	6	9	○	○	
31	2	3	2	3	2	3	6	9	○	○	
平均	1.9	2.4	2.0	2.6	1.5	2.2	5.5	7.2	○２２名	○２２名	

【資料 33　児童の変容と書き方のモデル、相互評価の有効性の分析結果】

この結果から、学級全体を見ると、３つの観点のいずれも平均点が上がっていた。また、３１名中２４名（事前調査時、本時の授業のどちらかが欠席の児童２名を除く）が点数が上がっており、全体の平均も上がっていた。しかし、点数が変わらないか、下がっている児童が数名いた。

以上のことから、ほとんどの児童が、本時の学習を通して、「目的や意図に応じて、必要な情報を関連付けて読み、理由を明確にして説明する」ための文章を書く力を高めることができたといえるのではないかと考察された。しかし、書き方のモデルと相互評価が非常に有効にはたらいたと判断された児童が２２名（事前調査時、本時の授業のどちらかが欠席の児童２名を除く）に留まったことや３つの観点の平均点が変わらない、または、下がってしまった児童が数名いたことを考えると、それを生かすための指導にもっと工夫が必要であったと考察された。

オ　成果と今後の改善策

(ｱ) 成果

○　書き方のモデルを児童の文章に反映させるために、書き方のポイントを押さえながら、事前に書いた文章を自己評価させたことにより、相互評価において、評価の視点をしっかりもたせることができた。

○　本時の目標を達成させるための一手段として、自分の考えを文章で書かせることは有効な手段であることが分かった。さらに、書き方のモデルや相互評価を取り入れて文章を書かせたことにより、全国学力・学習状況調査等で問われている「目的や意図に応じて、必要な情報を関連付けて読み、理由を明確にして説明する力」を伸ばすための手立てとなることが分かった。

(ｲ) 今後の改善策

○　書き方のモデルのよさをもっと実感できるような説明を加えたり、相互評価を生かしたりすることによって、他の人がより分かりやすい表現にしたり、自分自身が理解を深めたりすることができるようにしていく必要がある。

Ⅲ　研究の成果と今後の課題

１　研究の成果

○　文章で表現させる言語活動を取り入れた授業を行うことは、自分の思いや考えを整理してまとめて書く力を高めることへの有効な手立てとなることが分かった。

○　書き方のポイントを含んだ「書き方のモデル」を提示することは、児童生徒が情報の選択の仕方や目的に応じた文章の書き方の参考となり、より書く力を高めていくことにつながることが分かった。

○　評価の視点を明確にした「相互評価」を取り入れたことにより、児童生徒が自分や友達の書いた文章のよさや改善点に気付き、自分の文章を見直す客観的な評価の目を育てることができた。その結果「相互評価」は、目的に応じた文章を書く力を高めることに役立つことが分かった。

２　今後の課題

○　本研究では、小学校体育科と中学校理科で「書き方のモデル」や「相互評価」を取り入れた授業に取り組んだが、今後さらに継続した実践を重ねながら、その他の教科等においても授業に取り入れ、その有効性を検証していく必要がある。

○　例えば、生徒の書いた文章をモデルとして活用したり、相互評価を基にした話合いの中で考えを深めたりする活動など、今後は言語活動を充実させるための様々な授業を模索していきたい。

《参考文献》

文部科学省（2008.3）「小学校学習指導要領」東洋館出版社
文部科学省（2008.9）「中学校学習指導要領解説　理科編」大日本図書
髙木展郎編（2008.11）「各教科等における言語活動の充実」教育開発研究所
独立行政法人教員研修センター（2010.2）「言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫」
尾方篤編（2008.10）「教職研修」教育開発研究所
中央教育審議会（2008.1）
「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216828.htm